年賀状より

（年頭挨拶部分はカット）

（この他に近況報告相当がない方分）

4期　高田　昌嗣

最近は久住山など、近くの山々を歩いています。

5期　稲葉　正己

私儀昨年末をもって永年のサラリーマン生活を終えることになりました。在職中は、格別のご厚情を賜りましたこと、心よりお礼申し上げます。これからは自然に楽しみつつ、これまで時間に追われやり残したことに取り組んでゆこうかと考えています。今後とも相変わりませず、よろしくお願い申し上げます。

11期　小山　清

昨年は春にはパの街を歩き、秋にはハーフマラソンを走りました。

12期赤地　賢一　14期赤地　喜久子

2001.10.20 第一子 祐加子 結婚

15期　松下　重人

H14年4月山代で開業します。

16期　北川　隆次

春には昨年の雨飾山のリベンジを考えています。

16期　山内　政司

先日、運動不足がたたり、腰を痛めました。そろそろ健康を真剣に考えねばならない年令に来ているようです。

17期　長田　正文

今年は年間10非の山登りを目標にしたいと思っております。

17期　渡辺　和文

17期で金沢B級グルメツアーを計画中です。懐かしの店の情報ありましたらお教え下さい。

18期　大西　正明

昨年7月より東京勤務となり、単身赴任生活を送っております。単調な一人暮らしになりがちな自分を叱咤し、できるだけ外に出掛ける事にしています。たまに山に登ったりもしています。今年は南アルプスに挑戦したいと思っております。年末に17期（川村、藤野、長田さん）と忘年会をやりました。

20期　松下　和隆　20期　松下　早苗

謹賀新年

東海自然歩道を完歩する。この家族計画も2年目を向かえ、昨年の夏は裏富士を歩きました。田貫（たぬき）湖から本栖湖を経て精進湖までの15キロ。3泊4日のコースでした。右の写真は田貫湖畔にての一枚。

左の写真は、「本栖湖の人魚姫」。魔法使いにお願いして尾ひれを足に変えてもらったところ。と思いたくなるほど神秘的な湖。

右の写真は、パノラマ台（1305）から観た夏富士。今コースの最高点です。ちょっと雲がかかっていて残念ですが、富士の大樹海と左右に富士五湖（本栖湖、精進湖）が見下ろせる贅沢な穴場です。

ご心配いたします。来年の宴にまた参加します。

20期　久富　象二

新年早々、カンボジアへ行ってきます。

25期　辻村　善徳

昨年は秋にベルクハイムへ“単独行”しようと計画しておりましたが、残念ながら果たせませんでした。今年こそ…。

『花の山旅⑫白山』の光と陰

梅　典雅（１９期）

舟田編集長から頼まれた「裏話」になるのかどうかは別として、とにかくあんなしんどい思いはもう二度としたくないというのが、本音の話。

依頼の電話があったのは７月上旬。受け手がいないと、相手（「山と渓谷社」の下請編集者）は焦っていた。よくあるパターンだ。そもそもこの本は、花の群落写真とエッセイ風の文章で綴る「花のギャラリー」、百数十種の花を色別に並べて解説する「花図鑑」、花を見るための「コース案内」、代表的なお花畑で見られる花を網羅的に記す「花マップ」などからなる単行本、使用写真は３００点にもなる。おいそれと引き受けられる話ではない。が、「花図鑑」に相当する『白山　花ガイド』という前歴？がぼくにあったことが、結果的には、お互いの決め手になったように思う。

頼んでおきながら「手持の写真を即、送れ」などとは、さすが全国区出版社の威厳。これは、「審査」にほかならない。そして、送られてきた数冊のシリーズ既刊本を見て驚いた。名だたるプロの写真家が名を連ねているではないか！

幸か不幸か、審査をパスしたぼくは、７月中旬から取材を開始した。ところが、あの 2000 年は変な年で、下旬は予想外の悪天候に見舞われ、お花松原のクロユリも平年なら適期の８月上旬でまだ蕾。ならばと１２日に再訪したがまだ四分咲き。ええい、ままよと翌週、万難を排して登れば、花は満開なのに現地に着いたらガス。といった具合で、夏はのんびり東北の山へ、などは夢のまた夢、７回も白山に登るはめになった。後半は休みも取れず、マイカー規制もあって、朝５時市ノ瀬始発のバスに乗り、夕方５時３０分別当出合発の終バス目がけて駆け下りる、という鬼のような日帰り山行。思い出してもゾッとする。

だがしかし、それより辛かったのは、そのあとである。記録を見れば、その年の８月までに３０回を数えた山行は、その後パッタリ途絶え、休みはひたすら原稿書きと写真選びに追われる日々。猛烈なストレスとの戦いで、正月も登り初めもスキーもなかった。

花の山旅 ⑫

白山

梅　典雅

山と渓谷社

●著者紹介

梅　典雅（とが・のりまさ）

１９５５年、石川県金沢市生まれ。金沢大学在学中、ワンダーフォーゲル部に所属し、白山や北アルプスなどに登ったのが、高山の花との出会い。以来、山の自然に魅せられ、白山山系を中心に山遊びを続けている。著書に『白山　花ガイド』（橋本確文堂）のほか、共著・分担執筆として、『山と高原地図　白山』『マップルマガジン白山』『マップルマガジン自然の遊び場（西日本）』『日本百名山を登る』『関西の山歩き１００選』（以上昭文社）、『花の百名山登山ガイド』（山と渓谷社）、『写真集　白山』『山菜・木の実ガイドブック』（以上橋本確文堂）などがある。金沢市在住。

●編集スタッフ
Walk Corporation
●ブックデザイン
馬嶋正司（Popai Inc）
●本文デザイン
Walk DTP Systems
●図版
GEO
●取材・執筆協力
MUTSUMI
●情報提供等
石川県自然解説員研究会
石川県白山自然保護センター
白峰村・尾口村・吉野谷村
（株）ツウワン白峰
（財）白山観光協会
（株）橋本確文堂
（株）リトルアドベンチャー
●花図鑑の植物同定
畔上能力

に穴をあけずに済んだのであるが、ここで思い出した裏話をひとつ。シリーズ⑤『白馬岳』の「花図鑑」の解説に、ぼくが『白山　花ガイド』で試みた名前の由来や漢字表記が多くあることに気づいた。実は、数年前、白馬のみやげもの屋で目にした『北アルプス　花ガイド』なる本、体裁はもちろん、花を色・形で分ける苦心のオリジナリティまで見事にパクられ唖然。実用新

栂典雅の 山の花撮影講座

白山の花を撮る

▼はじめに

白山に登りはじめて20数年、意識して写真を撮るようになってからも10数年を数えるが、いたずらに年を重ねるばかりで、これまでも、そしてを分これからも素人の域を脱し得ないであろう私である。加えて、撮影技術に関する専門書は多々あり、このシリーズでも著名な方々が的確な手ほどきをされている。よって、ここでは、私なりの撮影に関する考え方と白山で花を撮る際に参考になると思われる事柄を記すことで、お許しを願いたい。

▼私が考える花の撮影法

花の撮影にもさまざまな目的や意図と、それに応じた技術、手法があることはいうまでもない。それを以下に整理してみたが、あくまで概念的な区分であり、実際は中間的なことが多い。

●客観的な写真＝ありのままを写し撮る。

①図鑑的写真：個体としての特徴がわかるように、花にも葉にもピントを合わせて撮る。——作例1。

②生態的写真：種としての特徴に加え、生育環境もわかるように周辺を入れて撮る——作例2。

●主観的な写真＝自分の思いを表現する。

③造形的写真：感性に訴えかける花の色や形など、最も表現したい部分を強調して撮る——作例3。

④情景的写真：花を景観の主要素（ときには脇役）として、情感のある風景を作画する——作例4。

撮影中の筆者。撮影機材の写真もそうだが、機材や私がいるのは「白山酒主」である。念のため

作例1：ハクサンコザクラ
全体を写すことを意図したが、結れた茎まで撮ってしまった失敗例。55㎜マクロ使用。

＊1　説明的・写実的な写真といってもよい。記録的なものもこの範疇に入る。①図鑑的では50㎜標準から100㎜くらいのマクロレンズ。②生態的では標準から広角系のレンズを使うことが多い。

花の全体から葉、あるいは周辺の環境にまでピントを合わせるには、絞りを絞って被写界深度を深めることになり、どうしてもシャッタースピードが遅くなるので、手ぶれ防止に三脚を使用する必要がある。

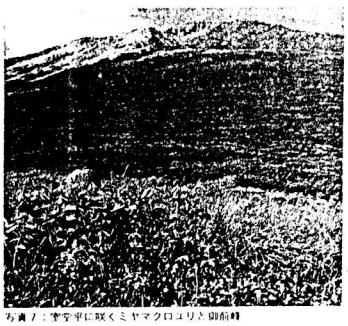


写真7：密生平に咲くミヤマクロユリと御前峰

植物18種は67㎜に書いたが、目立たないスゲ類や山地帯のものはともかく、ハクサンイチゲやシャクナゲ、フウロ、シャジン、トリカブトなどは、やはり白山でカメラに収めておきたい花たちであろう。

▼わたしの撮影機材（次ページの写真）

この日は、群落写真を目的としていたので、望遠系は省いて、6×7判を持っていった。とにかくシンプル・軽量化を心がけている（もともと機材・体力ともにないだけのことだが……）。

写真8：シモツケソウやイブキトラノオなどが混生する観光新道のお花畑

明確にして、あれもこれもと欲張らないことが大切。そのため、パックをホカイといった背景処理や全計な要素の思い切ったカットなどが必要になる。レンズ選択もそれに合わせるが、③造形的では①と、④情景的では②と同様のレンズを使う場合が多く、効果を高めるフィルターを使用することもある。

作例4：オンタデ
千蛇ガ池のあたりに映える赤の鮮やかさが目を引き、地味な花の存在感を表現したいと考えた。池とセットで伝説に語られる御宝池の岩峰を入れることにより場所を表した。35㎜使用。

＊3　弥陀ヶ原や室堂から、なだらかに横たわる御前峰やコンパクトにまとまった別山、お池めぐりコースからの特徴的な主峰群が代表的景観。そのほか、石徹白道からの別山や主峰部、四塚山あたりからの大汝峰、加賀禅定道からの四塚山、中宮道お花松原からの剣ガ峰と大汝峰など。宿泊施設のある室堂や南竜ガ馬場を拠点に、いくつかのポイントをめぐるのも効率的なやり方で、光線の向きを考慮して行動するとよい。

＊4　室堂や中宮道お花松原がおすすめ。ハクサンコザクラなら南竜ガ馬場もよい。

＊5　お池めぐりコースのコイワカガミ、チングルマ、ミヤマキンバイなどの群落のほか、観光新道「馬の立髪」付近や平瀬道上部、釈迦新道上部、展望歩道などに見られるミヤマトウキ、ニッコウキスゲ、オタカラコウ、シモツケソウ、ハクサンフウロ、タカネナデシコ、タカネマツムシソウなどの混生群落（詳細は「花マップ」参照）が代表的。

例4。

▼白山の花を撮る

白山の山容は概してなだらかであり、高山帯は標高2400㍍以上の狭い範囲を占めるにすぎない。また、独立峰であるが故に、近くに白山に比肩するような高さの山岳がない。このことは、いわゆるアルペン的な景観に乏しく、そういった山体をバックに花を撮影できる場所が一部の地域に限られることを意味している。

このような条件のなかで、白山に咲く花を表現するには、それなりの工夫が必要である。

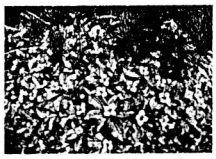
たとえば、縦位置で前面にできるだけ花を大きく取り込み、なだらかな山を「起こす」ことが考えられる——作例5。

逆に、広角レンズを用いて、山容のなだらかさと広がりを強調するといった手法もあろう——作例6。

作例5：ハクサンコザクラと御前峰／縦位置にして空を切りることで、なだらかな山容の御前峰に急峻感を奥行きを与えた

作例6：ウラシロトナカマドと大汝峰／前面に花を配し、のびやかな斜面と青空、広がる雲を強調した。24㎜広角レンズにPLフィルター使用

作例3：ツガザクラ
朝露の宿った花をねらった。ならば右の雲はカットし、縦位置で撮るべきであった。55㎜マクロ使用。



作例2：コゼンタチバナ
撮影時から、花自体にモデルとしてはやや不満があり、光の強さも気になったが、群生する様子とハイマツの下という生育環境の描写を意図した。24㎜使用。

＊2　創作的・印象的な写真といってもよい。この分野の写真では、特に主題、何を表現したいのかを

主力カメラは、過酷な環境下での使用にも耐える堅牢さと機能でマニュアル機のFM2／Tを使っている。三脚はローアングルができるもの。ミニ三脚は、このタイプでは丈夫な方で、大型三脚をいっぱいに広げられないような狭い道や岩場などでは、意外に重宝している。

▼おわりに

カメラ：ニコンFM2チタンボディ、ペンタックス67
レンズ：ニッコール24㎜F2.8、ニッコール55㎜マクロF2.8、SMCペンタックス(67)55㎜F4
三脚：ベルボン「カルマーニュ」643、雲台PH-263、ミノルタ製ミニ三脚
その他：レリーズ、PLフィルターなど
フィルム：フジRVP「ベルビア」をISO-100（増感）で使うことが多い。他に「プロビア」など

近年、白山の花を見ると「よくぞ生きてこんなにも咲いてくれた」と思う。白山の高山植物が分布するのは「西の岸っぷち」。このまま温暖化が進めば、真っ先に絶滅する運命にあるとも言われている。白山の花のすばらしさに感動することが、白山はもとより、自然をいとおむ気持ちにつながると信じ、本書もその一助になればと願ってやまない。

撮影をスムーズにするテクニック

❖フィルムは惜しまず設カット

私も写真を始めたころは、一枚ずつ撮って、あとで後悔することが多かった。いいと思った被写体に出会ったら、絞りや露出を変えて何枚か撮っておきたい。また、横位置で撮ったら、視点を変えて縦位置ではどうかといった工夫をするとよい。

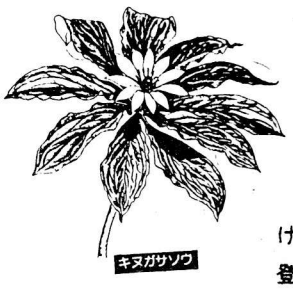
❖被写体をよく観察する

天候が急変といった場合はともかく、花や山は逃げていかない。あわてずに、まず観察し、何をどう撮りたいのかを吟味すれば、作例1や3のような失敗は免れる。また、見すごしてきた小さな花にも美を発見するといった観察眼が養われ、花の名前も覚えられるだろう。

案特許でも取っておけば良かったと思ったほどだ。『白馬岳』の著者が、その本を参考にしたかどうかは知る由もなく、元の文献が同じであれば解説も似てくることは当然であるが、『白山』はこのシリーズでは後発になるため、同じような書きぶりは逆にこちらの品性・良識を疑われかねず、いらぬことに時間と労力を費やした。ついでに言うと、この『白馬岳』や『北岳』『中央アルプス』などに、セリ科などの植物名誤りがあった。専門家がチェックすることになったようで、『白山』の奥付にも「花図鑑の植物同定」者の名が記されている。

なお、「取材・執筆協力」者については多言しないが、撮影アシスタント兼モデル？から食料兼記録係、ボッカ、運転手、写真の整理・選定、カウンセラー、その他雑用まで、あきれながらもこなしてくれ、まさに内助の功。陰の力であったことは間違いない。

著者軽薄


キヌガサソウ

付：苦労の後には喜びがある。これがきっかけで、2001 年夏は市毛良枝さんと白山に登る機会に恵まれた。『山と渓谷』2002 年６月号の特集だとか・・・。

＊内助の功の主は、21期栂　睦美さんです。

＊前ページは無断複製に該当しそうですが、あくまで「宣伝」です。ＯＢの皆さん、現役のみなさん、本物は美麗フルカラーです。
山渓のためにも、栂さんのためにも、実物を買いましょう！

２００１年６月３日（日）北日本新聞より

北ア・毛勝谷

2人滑落、重軽傷

二日午後零時半ごろ、北ア・毛勝山の西側にある毛勝谷（約一、九〇〇㍍）で、下山途中の広島市東区牛田東、弁護士、新谷昭治さん(七〇)と広島県廿日市市串戸、団体職員、乃美康明さん(六〇)が約二百三十㍍滑落、新谷さんは深さ約十五㍍の雪渓の割れ目に転落した。県消防防災ヘリで県立中央病院に運ばれ、新谷さんは全身打撲で重傷、乃美さんは頭や肩などの打撲で軽傷。

新谷さんらは広島県からの三人パーティーで、一日に魚津市側から毛勝山に登った。魚津署によると、下山途中に新谷さんが雪渓で足を滑らせ、前にいた乃美さんも巻き込まれた。登山中に事故を知った金沢市の男性公務員(四五)が携帯電話で一一九番。県消防防災ヘリが魚津署山岳警備隊員を乗せて二人を救出した。

毛勝山（二、四一四㍍）の頂上は魚津市と宇奈月町の境にある。

毛勝山遭難救助体験記

栂　典雅（１９期）

2001 年６月２日の正午過ぎ、ぼくと深田君（20 期）は、毛勝山の山頂をあとに、毛勝谷源頭の雪渓を下っていた。実は、毛勝は数年来、「グループ藪」改め「山楽同人やぶ」の栃尾君や久富君（20 期）らと「行こう、行こう」と言っていた山で、ＫＵＷＶ富山支部（そんな組織はないと思うが）が誇るアルピニストの早川君（19 期）をリーダーに、というのがぼくの思いであった。ところが、他のメンバーは、仕事、アキレス腱切断、痔など諸般の事情により、参加できなくなったというわけだ。

稜線直下の傾斜は、４０度近くはあると感じた。「帰りはグリセード。ウッヒッヒ」という楽しみに、恐怖心が交錯してきたが、それでもアイゼンをつけずにソロリ、ソロリと滑っていた。下りはじめてすぐに、犬を連れた３人組を抜いた。稜線のコルで幕営していたパーティで、大きなザックを担ぎ、怖くて立って歩けずに、尻をついている者もいた。

【毛勝谷（阿部木谷）の登り口付近から】

さらに下ったとき、大きな叫び声が聞こえ、振り返るとあの登山者が滑落してゆく。そして、もう一人。一瞬、止めようと思い、駆け寄ったが、あまりのスピードと急斜面に、見送らざるを得なかった。はるか下方で、一人が止まったのが見えた。これは、現実のことなのだ。とにかく急がなくてはならない。グリセードで下る

が、落ち着かなくてはという意識と緊張からか足が疲れて、小刻みになる。やっとたどり着くと、顔面血だらけではあるが、意識はしっかりしている。先に滑落したもう一人を探すと、深さ６メートルほどのクレバスの底に、こちらも血だらけで倒れていた。生きていることはわかったが、呼びかけても返事がない。

これはヘリしかないと思った。深田君もかけつけたが、ザイルもなく、クレバスには降りられない。そこへ、ボーダーが滑ってきたので、呼び止めて連絡を依頼。その直後、下ってきた登山者の携帯を使い、魚津消防署にヘリを要請。クレバスの遭難者は、反応するようになり、投げ入れたスポーツ飲料も飲んだので少し安心したが、ショックのせいか意識は朦朧としているようだ。何度か消防や警察から問い合わせがあり、遭難者の様子や現在地、天候、風速などを知らせるが、ヘリの遅いこと、通報から１時間はたっただろう。

救助隊員が降下して、クレバスから遭難者を吊り上げようと試みるが失敗。山岳警備隊を呼ぶことになったが、ドジなことに無線は電池切れ。携帯で連絡はとれたものの、あっという間にあたりはガスに包まれ、どうなることかと不安が胸中を去来する。それに、寒くて歯の根も合わなくなり、ポロシャツに薄いカッパだけという軽装を後悔した。

しかし、幸運にもガスの晴れ間があり、山岳警備隊員が降りて遭難者を救出、ヘリに収容することができた。この頃には、登山者も増え、みんなでザイルの確保やヘリへの収容に協力したが、ホバリングの風圧はすさまじく、自身の確保も怠れない。そして、遭難者のザックを深田君と交代で担ぎ、降り出した大雨の中を下山

【降下する救助隊員】

したのが４時１５分、３時間近くも現地にいたことになる。

結局、クレバスに落ちた人は、記憶に障害が残ったものの、１か月後に退院したと聞いた。事故の原因は、端的にいえば、自分たちのレベルを超える山に来てしまったということであろう。しかし、軽装でアイゼンもはかずにヒョコヒョコとグリセードまでしていたぼくも、ひとつ間違えば誰かを巻き添えにしていたかもしれないと思うと怖くなった。

なお、新聞記事の「230 メートル滑落」は標高差で、距離はゆうに 500 メートルを超えていた。岩の斜面にぶつかった際や雪上の大石に頭を強打しなかったことは幸運だった。

【収容される遭難者】

白山での遭難者救助について

３７期　若山　悟

この新聞記事は、白山関連で「単に」よけておいただけでした。それが、後日、遭難者救助表彰の記事中に「若山　悟」さんの名前を見付けてしまいました。あの時編集長の目は怪しく光り、「会報・白羽の矢」一本を「予約済み」と、よけたのでありました。

今時の中高年登山が、遭難すれすれで行なわれていることがよくわかる、貴重な現場報告です。

また、高校山岳部がどんな活動をしているのか、判るような写真もご提供いただきました。

北　國

2001年（平成13年）6月3日　（日曜日）

白山で女性滑落、重傷

登山中、県防災ヘリが救助

二日午後零時四十二分ごろ、白山登山道のエコーラインの万才谷付近（標高二二〇〇㍍）を登山中の金沢市三馬一丁目、会社員女性（五三）が滑落したと、別の登山者から鶴来署に通報があった。松任石川広域消防白峰分署員や登山中の県高校山岳協会員らが女性を登山道まで引き上げ、午後四時四十五分、県消防防災ヘリがつり上げて救助した。女性は鶴来町水戸町の公立つるぎ病院に運ばれたが、右足首の骨折と全身打撲で重傷。

鶴来署によると、女性は二日朝、別当出合から一人で登山し、同日午前十時四十分ごろ、残雪に覆われた現場の登山道から誤って雪の斜面を約五十㍍滑落したらしい。

付近にいた登山者が女性を見つけ、別当出合まで降りて知らせ、高校総体の山岳競技で居合わせた県高校山岳協会員が通報するとともに、救助に参加した。

救助した女性をヘリから担架で救急車に運ぶ消防隊員＝2日午後5時20分、鶴来町の手取川十八河原

去る６月２日、白山で遭難者を救助したが、その原稿依頼が６ヶ月後に突然やってきた。私としては、すっかり忘れていたことだったので思い出せる範囲で書いていきたい。

まず、新聞には高校山岳協会の人々が救助したと書いてあったが、それは誤りで石川県高体連登山部が正しい。この組織は、高校の山岳部の顧問教諭で構成されているものであり、私も小松高校山岳部の顧問として、この組織の一員になっている。大学時代、私は雪山には行かず、３シーズンだけ参加していたというナメた部員であったが、そんな私が最近では同期の中で一番山に関わっているというのも、なんだか不思議な感じがしている。この高体連登山部の活動は、主に各高校の山岳部の練習登山・高校総体・国体などの引率である。その他に、数年に１回の割合で、ヒマラヤ登山、パキスタンでの学校の建設や植林などのボランティア活動も行っているが、私はこれらには関わっていない。

事件は、この組織が主管している高校総体３日目に起きた。高校生約80名、顧問教諭約20名は、朝９時頃白山室堂を出発し、市ノ瀬までを砂防新道を通るルートで下山していた。

この時期はまだ、かなり雪が残っており、室堂も屋根しか見えていないくらいである。黒ボコ岩直下の十二曲付近も当然雪がべったりとついていた。そのとき私は、生徒が安全に下りるのをサポートするために、急いで下のほうまでいかなければならなかった。そのため、覚えたてのグリセードをやってみたら、案の定転んでしまった。ピッケルで止まろうと思ったけれどピッケルを離してしまい、１００ｍほど滑落してしまった。幸いにも他の顧問が下にいて止めてもらったので事なきを得たのだが、その後急な斜面を下りるのが怖くなった。

そんな中、南竜分岐を過ぎて甚ノ助小屋に行く途中で、１組の中年夫婦（？）があとから追いついてきた。登山隊長であるＫ教諭が話しかけたら、エコーラインから女性が滑落して万才谷で動けなくなっているので、救助を要請するために下山しているところだということであった。携帯電話を持っていたがその辺は電波が届かないので、公衆電話があるところまで下山するということだった。天気は曇りではあるが、ガスってなかったのでヘリが飛んできて救助するだろうと私たちは思い、大会中でもあったのでそのまま下山した。

しかし、甚ノ助小屋で休憩していたときからだんだん天気が悪くなり、小屋を出発してまもなく小雨が降りだした。１８５０ｍ付近まで下山したときに、天候がかなり悪化してきた。ヘリが飛ぶかどうかわからない状態にまでなったので、誰か遭難者の側にいたほうが良いのではないかということになった。大会中は隊を３つに分けて行動しているが、そのうち２隊はすでにかなり下山しており、大方のベテランの顧問も一緒に下山していた。私は最後尾の隊と一緒に歩いていたのだが、その隊は顧問は約６名、生徒約２０名だった。まずは生徒を安全に下山させることが一番優先されることなので、残った顧問の数を考えて、遭難者の捜索は比較的装備もしっかりしていたＫ教諭と私が捜索に行くことになった。私は雪山の経験が浅いので少し不安になったが、同じ学校で顧問をしているＫ教諭には絶大なる信頼をおいているので、一緒ならば何とかなるだろうと思って行くことにした。ツェルトとガスボンベを他の顧問から借りて、私とＫ教諭は下りてきた道を再び山のほうへ登っていった。

南竜分岐を過ぎた頃から、雨風が強くガスも深くなり、視界は５ｍ程になった。エコーラインを越えて、遭難者がいるという情報があった万才谷付近に着いた。この後は、斜面はかなりきつく、ステップがない道をトラバースしていかなければならなかった。視界が悪かったので下はほとんど見えず、どのくらい深い谷なのかわからなかった。
私は数時間前の滑落が思い出されて、今ここで滑落したら、いったいどこまで落ちるのだろうかと不安になった。しかし、人１人の命がかかっている。ここで逃げたら担任をしているクラスの生徒たちに堂々と顔向けできない。私の頭の中では、プロジェクトＸのテーマ曲である中嶋みゆきの「地上の星」が流れていた。以前、ホテルニュージャパンの火災における救出劇が放送されたが、ホテルに取り残された人を救出した消防士に自分を置き換えていた。

雪は凍っていて、なかなかステップをつけられなかったが、少しずつトラバースしていった。すると、突然前を歩いていたＫ教諭が滑落した。あっという間にガスの中に消えて

いった。少ししてから「大丈夫」というＫ教諭の声が聞こえたのでホッとした。しかし、信頼をおいていた人でさえも滑落したので、私としてはかなりびびってしまった。Ｋ教諭が下から上ってきて私と合流するとき、私も２ｍ程滑って「うぁ」と大声をあげた。起き上がったとき、ふと女性の声がかすかに聞こえた気がしたのだが、Ｋ教諭は聞こえなかったといっていたので、私も空耳と思ってあまり気にとめなかった。

視界がほとんどきかない状況で、遭難者が上にいるのか下にいるのか全くわからなかった。下手に動くと、私たちも自分の位置がわからなくなり迷ってしまうと思ったので、雪融けして露出している岩を目印にして、上の方に登ってみようということになった。さあ登ろうかと思ったそのとき、一瞬ガスがサッとはれて２００ｍ～３００ｍ位前方に、ワインレッド色のカッパを着た人が横たわっていて手を振っていた。「いた！」と私は思わず叫んだ。体内に大量のアドレナリンが放出され興奮した。私たちは遭難者に近づき、「おーい」と叫んだら今度はぐったりとしていた。さらに近づき、まじかに遭難者をみたらハッとした。膝のあたりからズボンを通して出血しており、足も変形していた。顔もやつれてかなり衰弱しているようだった。「もう大丈夫ですよ。」とりあえず安心させようと私は声をかけた。

遭難者は何時間も強い雨風にさらされていたので、顔や手がかなり冷たくなっており震えていた。私は持ってきたツェルトを遭難者とともにかぶり、背中や手などをさすったり飴をなめさせたりしてとにかく安心させようとした。遭難者はホッとしたのか、「心細かった」と何度も何度も繰り返しつぶやき泣いていた。話を聞くと、遭難者は金沢市内に住む５０代の女性で、百名山を登ることを趣味としていた。今回は仲間３人で白山に登る予定だったが、２人が都合悪くなったので１人で登ってきたそうである。別当出合から黒ボコ岩経由で室堂まで行く予定だったが、間違って南竜方面に来たそうである。エコーラインを登っていく人を見かけて、軽アイゼンとストックを装備していたので自分も登っていった。結構上の方まで登っていって一息ついたときに、あやまって５００ｍ～６００ｍほど滑落したのである。斜面はかなり急で、岩や木などがところどころでているところを回転しながら転げ落ち、途中岩などにもぶつかったりしたようだが、怪我の症状は足の骨折ぐらいにみえるのが奇跡的だと思った。ツェルトをかぶっていても寒いということだったので、セーターを着るように言ったが遭難者は持ってきていなかった。そのことに私は唖然としたのだが、仕方ないので私のシュラフカバーを靴の上からはかせて、ツェルトの中でガスコンロを使って暖をとった。発見してからこの間、Ｋ教諭は無線で下の方にいる私たちの仲間に連絡をとっていた。本部は市ノ瀬にあり、そこまでは何人かの顧問が
無線を中継していたそうである。連絡によると、天候が悪くヘリが飛ぶことができないということで、仲間の教諭がレスキュー隊と共に現場に登っているということだった。

遭難者はずっと寒がっており、唇もあおく辛そうで、ちょっとでも足を動かすととても痛がった。そのため急な斜面で不安定な場所ではあったが、なんとか落ち着かせてこれ以上衰弱させないようにすることで精一杯だっただけに、私自身この連絡は非常に勇気づけられた。雨風はずっと止むことなく、ツェルトも飛ばされそうになることもあったが、ツ

ェルトの中３人で仲間の到着を待つことにした。

１時間くらいたって雨が止みガスも少しはれた頃、仲間の教諭２人とレスキュー隊２人が到着した。彼らはザイルを持ってきていたので、まず添え木で足を固定してザイルで急斜面から谷底まで１０ｍほど下ろした。私はそのとき、何でまず発見したとき添え木をしなかったのだろうかと思った。骨折の時は添え木をするのは常識として知っていたはずだったけれども、まず体を温めて落ち着かせようということばかり気をとられて私はすっかり添え木のことを忘れていたのだ。こういう緊急時には自分がまず冷静になって対処しなければいけないことをあらためて感じた。

谷底に下ろした後、天気が安定しガスもはれてきたのでヘリが飛ぶことになった。しばらく待っているとヘリが上空に到着した。レスキュー隊の人が、遭難者をホバーリングしているヘリに乗せるとヘリはそのまま飛んでいった。

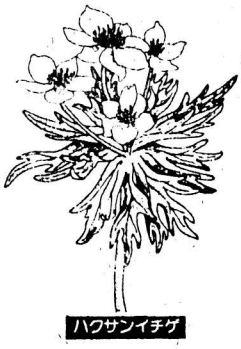
この頃にはガスもすっかり消えていたので、周囲の状況がよくわかった。現場はエコーラインから南竜へむかう夏道からは、谷よりに大きく外れた地点だった。あらためて、遭難者が滑落しただろうと思われる斜面を谷底から見上げると、とても急な斜面だった。夏には高山植物でいっぱいになるこの辺も、雪がついたらこんなにも危険な場所になるのだ。

今回の救助を行って、つくづく自然の厳しさを感じると共に、命の重み、勇気、そして緊急時での冷静な判断というものがいかに大切であるかを学んだ。

私たち顧問４人は下山することにした。私の頭の中では、プロジェクトＸのエンディング「ヘッドライト・テールライト」が流れていて、晴れ晴れとした気分で現場を後にした。

６月２日の御前峰
遭難者を救助する数時間前。筆者は後列左端

H13年10月下旬　秋山練習登山　奈良岳ピーク
（ブナオ峠～奈良岳往復）



H12年の夏山合宿　双六小屋付近
　計画は双六小屋から徳沢までだったが、部員達の体調不良などにより新穂高温泉へ下山。